

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

夏の間はずっと川で魚をとる子どもたちの歓声が聞こえる。あまり長く川に入っているとクチビルがむらさき色になるので、子どもたちは石の上に腹這いになって体を温める。太陽の熱した石の熱さが子どもたちの体に沁みていく。土手の形に組んだ石垣の間を蜥蜴が走り抜けていく。蜥蜴は風の音でも聞き分けようとするのか、ときどき止まっては、走り出す。蜥蜴の姿が見えなくなると草を揺るがす風のほかには動くものが何もない。地球の上に腹這いになって地球と一緒に回っているのだ。眠くなつていく時間がゆつたりと流れるのは、地球が子どもを背中から振り落とすまいとしているからだ。

私は子どもの時にこのようにして石のうえに腹這いになって体を温めた。ふたたびその石を訪ねて、その上に腹這いになっている子どもを見たら、「あの子は自分だ」と思うだろう。五〇年へだてて、そこに子どもを見ることができたならば、さらに五〇年へだてて訪ねても、そこに子どもの姿を見ることができようだろう。

もしも私の肉体が滅びた後でも、何かの責務と引き替えに、この世に私の霊を残すことが許されるのならば、私は川で魚をとる子どもの守護神になろう。霧に乗って谷を下り、川面に光る波を見て、今日も大丈夫だと確かめ、風にまぎれて果樹園の木々に午後には雨が訪ねてくると語りかけ、蜜蜂に雨の前の仕事をナマけてはいけないと念を押す。

こうして①永遠に悔いのない日々が続くことを祈ることができる。私の子どもが同じ暮らしをし、子どもの子どもがまた同じ暮らしをする。野の中の道にかけた石の橋がいつまでも同じ責務に夕えて悔いがないように、果樹園のはずれのスグリの木がいつまでも同じ高さのままであることを嘆くことがないように、この生を生きることができれば、永遠に再び生きて同じ道を歩むことを願うだろう。

永遠の反覆が生き生きと実感されるということが、あらゆる文明・文化の隠れた存在理由なのである。文明も文化も、自然の自らカクれようとする意志に逆らい自然の姿を操作可能なメカニズムが見えてくるところまでさらけ出させて、自然を変容させて、人間の役に立ったと自画自賛する。本当は、そのように自然を変容させることで人間自身も変容してしまっているのだ、そ

の変容が人間の役に立ったと言えるためには、文明も文化も超えた人間の同一性がしつかりと擱おろまれていなくてはならないはずなのに、新しい玩具がんぐに夢中になった子どもが目的を離れて手段の追求におぼれてしまうように、人間は技術におぼれやすい。

石を使つて木の実を割ることを覚えた猿が、対象物が食べられるか否かに関わりなく、ただ丸い物であれば何でも割つてみたという好奇心を動かし始めたとき、その猿は人間への一步を歩み始めている。^②その一步は目的と手段の全体としてのバランスを回復する他の方法が開発されない限り、その猿に滅亡の運命を用意するだろう。技術開発をお金で管理すれば、バランスは保たれるだろうという楽観論もある。技術とは手段である。目的が何であるかを忘れてまで、手段それ自体を開発していくという態度が、技術開発にはつきものだ。手段を自己目的化する、局部化された手段に金銭という普遍的に交換可能な価値評価を設定し、どのような手段でも価値をもちうるというシステムを、人間が作り出した。それは一九世紀から二〇世紀初頭のことだったが、その当時には、目的と手段のバランスが回復されるというオプティミズムがあつた。

自然は完全に破壊される前に、自分で自分の本来の姿を取り戻すはずだと言う人がいる。どんなに人間が自然を破壊しても、人間が自滅する前に自然のなかにひそむバランス回復の機能が働くというのだ。自然が自己回復を達成するなら、人間もまた救われるだろうから、あまり心配しなくてもいいのだと言う。

予見された危険は回避できるという合理主義的なオプティミズムもある。もしも石油の燃やしすぎが温暖化の原因であるならば、その原因を除去すれば結果は予防できるという合理的信念は、原因を除去すれば結果は予防できるという因果関係をモデルとしてしている。現実はずっと複雑である。

たとえば、銀行の巨額の不良債権が不景気の原因であると言われる。しかし「不良債権を国家が肩代わりして処理すれば世界的な経済恐慌は回避できる」という判断と、「不良債権を国家が肩代わりして処理しなければ、世界的な経済恐慌は回避できない」という判断とのギャップは、非常に大きい。^③これは「石油を燃やすと温暖化が起こる」「石油を燃やすのをやめれば温暖化がストップする」という判断と「すくなくとも石油の消費をやめない限り温暖化はストップしない」という判断のギャップと似ている。原因と結果が、純粹な機械論的な因果関係であれば、そのようなギャップは生じない。たとえば経済問題であると「不良債

権を国家が肩代わりして処理してくれるのであれば、自力で不良債権を解消しようと努力すると、国家資金の導入の際に他の金融機関よりも不利益になるから、自力の解決をしないことが経済的な合理性の発揮になる」というモラル・ハザードが発生する。

④ 目的と手段の関係が、ミクロレベルでははっきりするが、マクロレベルになると分からなくなる。ミクロレベルでは企業の効率性という健全度の指数で、倒産もまた合理的であるという判断が可能になる。マクロレベルになると、簿外債務という不正を行つた企業の存続を図ることが合理的だとまで言われる。目的と手段の自明性、原因と結果の因果性に対して複雑さが排除できるといふような条件がなりたたないと、「AだからBが起こる。AをやめればBは発生しない」という合理主義は機能しない。

経済性というのは、本質的には手段であつて、経済性自体が自己目的ではない。ところが、実際には経済性という自己目的のために、本来の目的が犠牲になる。

⑤ 自然それ自体のもつ自動調整システムも市場経済という自動調整システムも、自然を守るために有効に機能してはいない。だから自動調整のシステムが機能しないとき、自然をいわば不自然な仕方で維持したり、回復させたりしなくてはならない。もつとも根源的な自己目的は何か。それは、宗教よりももつと深い、自由よりも正義よりも古い、^⑥生命の歴史が人間に刻み込んだ自然への愛である。

(加藤尚武『現代人の倫理学』による)

注 オプティミズム……楽観主義。楽天主義。

不良債権……回収が困難な債権(貸付金)。

モラル・ハザード……倫理観や道徳的節度が欠如していること。

簿外債務……貸借対照表に記載されていない債務の総称。

問一 二重傍線部 a～e のカタカナを漢字で書け。

問二 傍線部①に「永遠に悔いのない日々が続く」とある。「悔いのない」とはどのような状況に対しての言葉か。十五字以内で説明せよ(句読点を含む)。

問三 傍線部②に「その一步は目的と手段の全体としてのバランスを回復する他の方法が開発されない限り、その猿に滅亡の運命を用意するだろう」とある。なぜ「滅亡の運命」が用意されることになるのか。「目的」と「手段」とをそれぞれ明らかにしながら説明せよ。

問四 傍線部③に「石油を燃やすと温暖化が起こる」「石油を燃やすのをやめれば温暖化がストップする」という判断と「すくなくとも石油の消費をやめない限り温暖化はストップしない」という判断のギャップ」とある。この二つの「判断」には、どのような「ギャップ」があるというのか。本文中の言葉を用いて説明せよ。

問五 傍線部④に「目的と手段の関係が、ミクロレベルでははつきりするが、マクロレベルになると分からなくなる」とある。「ミクロレベルでははつきりする」のはなぜか。本文中の言葉を用いて簡潔に説明せよ。

問六 傍線部⑤に「自然それ自体のもつ自動調整システムも市場経済という自動調整システムも、自然を守るために有効に機能してはいない」とある。

1 「自然それ自体のもつ自動調整システム」と同じ内容を表現している部分を、本文中から二十字以内で抜き出して答えよ。

2 「市場経済という自動調整システム」が「自然を守るために有効に機能してはいない」とはどういうことか。本文中の言葉を用いて七十字以内で説明せよ(句読点を含む)。

問七 傍線部⑥「生命の歴史が人間に刻み込んだ自然への愛」について、筆者の思いが最もよく表れている段落を抜き出し、始めと終わりの五字を答えよ(句読点を含む)。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

営団地下鉄の赤坂見附駅は永田町駅と通路で接続されていることもあって、朝夕は非常に混雑する。人の波は申し合わせたように同じテンポで動き、自分と同じ方向に向かう波に混ざるとあとは足を前後に動かすだけで入口の階段に運ばれるように進む。地面にあいた穴ぐらのような地下階段を昇ると、地下の蛍光灯に馴れた目に太陽の光が眩しい。殊に春は、交差点の交番の傍に植えられた樹々の葉のあいだから洩れる白い光が目射る。

哲雄は階段のいちばん上まで来てから立ち止まった。高速道路のむこう側にそびえ立つ、ホテルの巨大な建物に目を向ける。なんとということもなしに溜息をついてみた。最近、身体からだの調子が悪いように思えるのは気のせいだろうか。

一流商事会社の海外渉外課勤務といえれば聞こえはいいが、近ごろの哲雄は身体も神経もすり削られているような思いがする。削り取られていった分の中に、かつての自分の大切なものがあつたような気がして、それを思うともっと重い気持ちになる。

ブリーフケースと一緒に小脇こわきにはさんでいた折りたたみ式の青い傘が、音を立てて落ちた。たたまれたままの傘はコンクリートの階段を二、三段転げていった。今朝のニュースが、今日の午後からの降水確率を七十パーセントと告げていた。出がけにニュースを小耳にはさんだ哲雄があわてて持って来たその青い傘は、朝の地下鉄銀座線の中で、電車の振動に合わせてブリーフケースと一緒に網棚の上で揺れていた。

網棚の上で揺れる傘は、哲雄にあることを思い出させた。今朝の哲雄がいつもにも増して疲れた気分にいるのは、もしかしたらそのせいかも知れない。

まだ高校生だったころの話だから、もう六、七年は前のことになる。都心にある私立高校の生徒だった哲雄は、やはり地下鉄を使って学校に通っていた。

その日も昼間から雨が降り、哲雄は数人の友人たちと一緒に、学校から駅までを走った。誰も傘を持ってきていなかった。学

校の昇降口の傘立てにいつも何本かささっている忘れられた傘にも、その日は誰もありつけなかった。

地下鉄に乗って何駅かを過ぎすうち、途中から乗って来る人の濡れ具合で雨が激しくなってきたのが判った。

哲雄は四時に女の子と約束していた。約束の場所である喫茶店は、駅からかなり歩くところにあつた。ずぶ濡れで行きたくはないと思つた。

「あー、やべえなあ」

哲雄は舌打ちして友人たちに言つた。

「どうしたの」

「俺、これから女のコに会いに行くのに――」

「だから何なんだよ」

「――傘がない」

「いいじゃん、別に」

「やだよオ、濡れちゃうじゃん」

友人たちはへらへらと笑い、ざまあみろ、とか何とか言つた。雨雨降れ降れ、もっと降れエと、友人のひとりがふりを付けて歌つた。当時ヒットしていたその歌を、ふざけてふり付きで歌うのが哲雄たちの間では流行つていた。

「クソやべえよ、どうしよっかな」

呟いて正面を向いた哲雄の目に、向かい側に坐つて文庫本を読んでいる年とつた男の姿が映つた。深緑とも黒ともつかぬような色のレインコートを着たその老人は、熱心に本を読んでいる。老人の真上の網棚の上には濡れた傘がたまたま置いてあり、時おり本の上にポトリと水滴を落としていた。濡れた傘を気にしているふうにときどき上を向き、またすぐに本に目を戻す。老人はさつきからそんな動作を繰り返していた。

老人の様子をしばらく眺めているうちに、哲雄はあることを思いついた。気が咎め^{とが}ないこともなかったが、びしょ濡れの姿で女の子と会うよりはいいと思った。雨に濡れた制服はひどく嫌な匂^{にお}いがするのだ。

哲雄の降りるひとつ手前の駅に着いた。電車が再び動き出したとき、哲雄は隣りに坐っていた友人の耳もとで、囁^{ささや}くように言った。

「あの傘、ギっていい？」

友人ははじめ少し驚いた顔で哲雄を見たが、やがてにやりと笑って答えた。

「いいけどさ、別に……。そしたら俺たち、むこうの車両に移るからな」

友人たちがひとつ隣の車両に移り、残された哲雄も立ちあがってカバンを抱えたとき、電車が減速して車体が前のめりに傾^{かた}いた。次の駅にさしかかって車窓が明るくなった。

哲雄は扉に身体を貼^はりつけるようにして立った。すぐ横に本を読む老人がいた。

扉が閉まる寸前、哲雄は網棚の上にある老人の傘をわし掴^{つか}みにし、素早くホームに降り立った。降りた哲雄のすぐ後ろで、シューと音がして扉が閉まった。隣の車両の窓から身を乗り出してその様子を見守っていた友人たちが、大声で哲雄をはやし立てた。哲雄は笑いながら友人たちに手を振り、おそ^②るおそる自分の後方を見やった。

哲雄は老人が怒っていると思った。怒って哲雄を指さしているはずだった。あるいは、悔しがって地団駄を踏んでいてくれても良かった。あのときいつそ、あの老人が窓を開けて、返せとか何とか叫んでくれれば良かったとすら哲雄は思^③う。それならば哲雄も、ちらつと舌を出して傘を片手に改札口の階段を勢いよく駆け昇^{のぼ}りたろうと思う。

けれどその老人は怒っても悔しがつてもいなかった。驚いて振り向きはしたが、彼はその姿勢のまま、窓のむこうから哲雄をじつと見ていた。見つめていたと言った方がいいかも知れない。ことばでは言いあらわせないほどひどく悲しそうな目で――。

④ 哲雄は今でも、あのときの老人の目を忘れることができないでいる。

気象庁の予想があたって、三時ごろから雨が降り出した。窓ガラスにあたっては流れ落ちる雨の滴の行方を目で追いながら、哲雄はまだ老人の傘のことを考えていた。

退社時刻を過ぎて外に出ると、雨は小降りになっていた。折りたたみの青い傘を開き、哲雄は駅に向かって歩き出した。小刻みなポツポツという音が、頭の上に響いている。

一ツ木通りを裏から抜けて、白い駅ビルの姿が見えてきたとき、ふとこのまま帰りたくないような気がした。大学を卒業してから親元を離れてはいるが、ワンルームの賃貸マンションに誰かが待っているわけではない。哲雄はそのまま廻れ右をして、たまに同僚たちと会社帰りに寄る小さな店に向かった。

歩き続ける哲雄の頭の中に、削り取られた自分の身体と心のことがあった。生きていく上でというよりはむしろ、生活をする上で、自分のある部分を削り取っていくことは必要なかも知れない。——ぼんやりとそんなことを考えていた。けれど何か——どんな「何か」なのかは判らないけれど——^⑤削り取れないものもあるような気がした。

「あの……」

声をかけられてふと我に返った。目の前に、背の低い痩せた男が立っていた。男は腕で雨をよけるような格好をして、長身の哲雄を見あげた。十八、九に見えた。

「ニューオータニって、どういうふうに行くんですか」

およそ人にものを訊ねているとは思えないぶっきらぼうな調子で、彼は言った。

「ニューオータニ？——えっと、まずここをまっすぐ行って、でかい道に出たら左に曲がって……」

哲雄の答えに頷きながら、男はいちいちそれを口の中で反復した。全部聞き終えると、男はぺこりと頭を下げた。

「どうも」

「傘ないの？ 歩くとかかなりあるぜ」

「はあ……」

「貸してやろうか」

哲雄は自分の傘を少し持ちあげるようにして言った。男は驚いて答えた。

「いや、いいですよ」

「いいよ、持ってけよ。バイトの面接かなんかだろ、濡れていたら印象悪いぞ」

哲雄のことは男は一瞬、真面目まじめに考えこみ、そうしてからさっきのようにぺこりと頭を下げた。

「すみません、じゃあ借りていきます」

⑥「返さなくていいからな」

男はもういちど頭を下げると、傘を受け取って小走りに去って行った。

哲雄は再び、今度は小雨に濡れながら歩きはじめた。身体も心も、年齢としを重ねていくにつれてどんどん削られていくのだろうが、あの雨の日の老人の目だけは、削ることはできないと思った。

——雨があがるまで飲んでるかな……。

小さく呟くと、雨雲に埋められた空が心なしか明るくなった。

(鷺沢萌「明るい雨空」による)

注 「ギっていい?」「……」「盗んでいい?」という意味。

問一 傍線部①に「近ごろの哲雄は身体も神経もすり削られているような思いがする」とある。それはなぜか。簡潔に答えよ。

問二 傍線部②に「おそろおそろ自分の後方を見やった」とある。このときの哲雄の気持ちはどのようなものと考えられるか。説明せよ。

問三 傍線部③に「それならば哲雄も、ちらつと舌を出して傘を片手に改札口の階段を勢いよく駆け昇れたらと思う」とある。「勢いよく駆け昇れた」とした場合の哲雄の心情として最も適当な説明を次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 傘は自分のものだという老人の傘に対する執着心からかうような心情。

イ うまく老人の傘を盗んだということを友人たちに自慢するような心情。

ウ これで雨に濡れなくてもすむという自分のことしか考えていないような心情。

エ 傘を盗まれたという老人の怒りや無念さを馬鹿にして軽蔑するような心情。

オ 老人の傘を盗むというゲームそれ自体を楽しんでいるような心情。

問四 傍線部④に「哲雄は今でも、あのときの老人の目を忘れることができないでいる」とある。それはなぜか。説明せよ。

問五 傍線部⑤に「削り取れないもの」とある。それは何か。具体的に説明せよ。

問六 傍線部⑥に「返さなくていいからな」とある。男に傘を「返さなくていいからな」と言った哲雄の心情を、老人と傘とをめぐる哲雄の記憶と関係づけて説明せよ。

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

結論からさきに書くと、「人生の目的は自由だ」と僕は考えている。自由を獲得するために、あるいは自由を構築するために、僕は生きている。少なくとも、今は本気でそう考えているのである。

そもそも、自由とは何か、^① についてももう少し説明が必要だろう。

僕の考える自由は、普通の人が思い描くそれとは多少ニュアンスが違っているかもしれない。たとえば、普通の人は、「子供は自由だ」「動物は自由だ」と言う。僕はその反対で、^② 子供は不自由であり、動物もけっして自由だとは考えていない。

自由というのは、「自分の思いどおりになること」である。自由であるためには、まず「思う」ことがなければならぬ。次に、その思いのとおり「行動」あるいは「思考」すること、この結果として「思ったとおり」にできた」という満足を感じる。その感覚が自由なのだ。

子供は、あれもしたい、これもしたい、と「思う」けれど、たいていは、そのとおりにならない。大人が「駄目だ」と制限するものもあれば、自身の身体的能力が不足しているためにできないことも多いだろう。だから、「自由にあれこれしたい」という気持ちには大人以上に持っているものの、子供はけっして自由とはいえない。はつきりいって不自由である。

動物の場合も同様で、僕が観察できるのはペットくらいだけれど、赤ちゃんのときはかなり自由になりたがる。いろいろ無謀なことをしようとする。しかし、成長して一人前になると、分別がつくためなのか、無茶をしなくなる。生きるため以外のことでは、新しい対象に挑戦するようなこともほとんどなくなる。新しいおもちゃを与えたときに興味を示すのは幼いときだけで、野生の動物というのは、腹が空いたら餌を探し、敵に怯えて生きているのではないか。ほんのときどき、休んだり眠ったりできる時間はあるけれど、自分がやりたいことを考え、つぎつぎにチャレンジしているようには見えない。

結局、敵の目を避け、餌を探すのが彼らの生涯の大半といつて良い。自由にどこかへ冒険に出ることはない。毎日決まった行動をとるのだ。そして、こんなふうに動物を見てしまうのは、僕が人間だからであり、動物はそもそも不自由だなんて感じてい

ないだろう。人間だけが自由な生きものだからこんな思考をするのだ。
 ③ 腹が空いたら好きなものを食べる。これは「自由」な状態だろうか？

普通は、これこそ「自由」の中の自由「自由の代表格」だ、と認識されているふしがある。現に、「俺は好きなものさえ食べていられれば、もうそれだけで幸せだ」と豪語する人もいる。まさに、食べるために生まれてきた、といわんばかりである。なんともまあ、動物的な感覚だなど微笑ましい。もちろん、食べるといってもいろいろな条件がある。最低限の栄養補給としての食事から、趣味的なグルメのレベルまでさまざまだ。一概に、食べることが動物的だとはいえないかもしれない。ここで書いているのは、かなり一般的、平均的な食事のことだ。

食欲のほかにも基本的な欲求がある。寝たいときに眠り、働かなくても良いなら、一日ごろごろとなにもしないでいたい。そういう状態が「自由」だと思ひ描く人はわりと多いのではないか。

「誰からも文句を言われない状態」という条件も重要だと思う。普通は、なにもしないでごろごろしていたら、誰かから注意を受けるからだ。それくらい、人から文句を言われ続けている人生、というのが多くの人が経験する現実なのかもしれない。どういうわけか、文句を言われると気分が悪くなるように、人間は成長の過程でプログラムされる。これは、もちろん「支配」である。

少し考えてみればわかることだが、腹が空いたというのは、肉体的な欲求であり、つまり、食欲は躰からだによる「支配」なのである。休みたい、寝たい、というのも同様だ。躰が頭脳に要求している。頭ではもつとしたいことがあるのに、躰がいうことをまきかない、そういう不自由な状況と考えることができる。

健康であることは、もの凄く感謝すべき幸せの一要因であることはまちがいない。病気のときには、自分の思うように行動できなくなる(ときには、思考もままならない)。誰もが「不自由」を感じるのが不健康である。

これと同様に、空腹や睡魔も、やはり、躰による支配なのだ。もつとやりたいこと、やるべきことがあるのに、人間は生きていくために食べなければならぬし、寝なければならぬ。作業の効率は落ちるが、死んでは元も()もないから、しかた

がない。躰は、この要求をあたかも「したいこと」のように頭脳に訴え、これが「肉体的欲求」となる。^④ 思考によって導かれた「自分がやりたいこと」とは発信源が異なる。違っていることがご理解いただけるだろうか。

このような「躰による支配」を、悪いことだと主張しているのではない。躰の欲求に応えることはとても大切だし(まっこうから拒否したら余計に不健康になる)、ときには第一優先になる。生きているかぎり逃れることができないのは紛れもない事実である。

ただし、一言だけつけ加えるなら、この「健康」が生きる目的になるという発想は矛盾しているだろう。^⑤ したがって、健康がすなわち自由ではない。健康であることが人生の喜びだというのは、僕は錯覚だと思う。それが真実ならば、生まれながらに不健康な人、自分に責任はないのに病気になる人、事故に遭って健康を奪われた人には、もう人生の喜びはない、ということになってしまう。

健康は、自由を得るための一手段ではある。また、「健康」の定義は人それぞれで違うし、同じ個人でも年齢や状況によって「健康」は変化する。誰だって、歳をとれば、若くて元気な状態には戻れない。それを不健康というわけではない。

生きていく以上、自分の躰のコンディションは、背負わなければならない荷物である。捨てるわけにはいかないし、交換することもできない。他者と比べて、自分の荷物が重いといくら嘆いても、それで軽くなるわけでもない。朝起きた状態が、その日のデフォルトであり、そこから自分が今日どちらへ向かって歩きますのか、しか日々の選択肢はないのである。^⑥ 自由というのは、その人が歩きださなければ、絶対に得られないものだと思う。

(森博嗣『自由をつくる 自在に生きる』による)

注 デフォルト……初期状態、初期設定。

問一 波線部「死んでは元も」(もない)は、慣用的に用いられる表現である。この空欄に入る語を、漢字一字で答えよ。

問二 傍線部①に「自由とは何か」とある。筆者は、「自由」を具体的にどのようなとらえているのか。「思い」「行動」「思考」「感覚」を必ず含めて、本文に即して六十文字以内で説明せよ。

問三 傍線部②に「子供は不自由であり、動物もけつして自由だとは考えていない」とある。

- 1 子供の場合、どうしてそのように言えるのか。筆者の考える「自由」に即して、具体的に説明せよ。
- 2 動物の場合、どうしてそのように言えるのか。筆者の考える「自由」に即して、具体的に説明せよ。

問四 傍線部③に「腹が空いたら好きなものを食べる。これは「自由」な状態だろうか?」とある。この答えとして最も適切な一文を抜き出し、始めと終わりの五字を答えよ(句読点を含む)。

問五 傍線部④に「思考によって導かれた「自分がやりたいこと」とは発信源が異なる」とある。「発信源」がどのように「異なる」のか。簡潔に説明せよ。

問六 傍線部⑤に「この「健康」が生きる目的になるといふ発想は矛盾しているだろう」とある。筆者はどのように「矛盾している」と言うのか。本文に即して簡潔に説明せよ。

問七 傍線部⑥に「自由というのは、その人が歩きださなければ、絶対に得られないものだと思う」とある。筆者はなぜそのように思うのか。「人生の目的は自由だ」といふ筆者の主張と関連させて、八十文字以内で説明せよ。